

中高生との意見交換会 委員会ごとのまとめ報告

議員と白陵中学校・高等学校の生徒代表による意見交換会が開かれ、各常任委員会でテーマを設定し、率直な議論が行われました。以下、各委員会からの報告書をまとめてご案内します。

総務常任委員会「選挙の投票率について」

1. 「知るきっかけ」と「伝える工夫」のギャップ

参加者の皆さんが身近なJR曾根駅の掲示板を見るなど「顔と名前を覚える」という小さな一歩から関心は始まっているものの「ポスターの顔と名前、色しか分からない」と感じており、街頭演説を一瞬通り過ぎるだけでは、具体的な政策まで理解するのは難しいのが現実です。

議員側も「投票率が5割を切るとショック」と感じており、お互いに「知りたいけれど分からない」「伝えたいけれど届かない」という歩み寄りが必要な状態であるとも言えます。ネットやSNS発信、公開討論会など「じっくり政策を知る場」がもっと必要です。

2. 投票へのハードルと新しい仕組みへの賛否

期日前投票やネット投票（スマホ投票）の議論では、もしもスマホ投票があれば、20～30代の投票率は間違いなく上がるものの、操作が難しい人へのハードルがあることや「自分の足で投票所に行く」からこそ1票の重みを感じられるとの意見がありました。

「初めての選挙に1回行ったら終わり」にしないために、大学進学などで地元を離れると「わざわざ選挙のために帰るのが難しい」という構造的な問題も見えました。

なかには「思わず誰もが欲しがるような、魅力的な投票済証」という提案もあり、SNS世代の若者を引きつける新たなアイデアも飛び出しました。

3. 「身近な不満」こそが政治へとつながる出発点

「物価が高い」「障害サービスの手続きがかなり面倒だと母が言っていた」との日常の不満や不便さ。これらこそが政治につながっていること。1票を投じるとは、私たち

は「政治家にはなれなくても、この人に託したい、ここを変えたい」という意思を伝える権利を持っています。

ポスターの向こう側の「遠い存在」だった議員が、「直接声を聞いてくれる存在だと初めて知った」という参加者の気づきが見られました。

18歳になったら投票に行こうと答えた人が「7人中6人」もいたことは非常に心強く、「どうかな」と迷った1人も含め、友人同士で「選挙行かへん？」と声をかけ合える関係が作れば、若者の声がもっと政治に反映され、自分たちの希望（若者向け・高齢者向けのバランスの取れた政策）を叶える一歩につながります。

今回の報告会は「お互いの歩み寄り」が見られました。

文教厚生常任委員会「高齢者福祉について」

1. 介護人材の不足

生徒から「若い人が減る中で介護をする側をどう確保するか」という質問がありました。議員側からは、介護保険制度の仕組みや処遇改善、外国人労働者の活用といった現状の対応策の説明がありました。団塊世代が75歳になり始めた今、人手不足はこれから本格化するという認識を伝えました。

2. 移動手段の確保

生徒から「ボランティア交通について、広報をみたことがない」という意見がありました。議員から阿弥陀町のボランティア交通の紹介や、タクシーチケットの配布制度（要支援・要介護認定者対象）も説明されました。

また、移動手段と並んで、買い物へのアクセスも課題として挙がりました。「移動手段がない人が買い物に行くための取り組みはあるか」という質問に対して、議員からマックスバリュ・コープの宅配サービスなどの民間での取り組みが紹介されました。

3. 相談・認定の入口

生徒から、介護認定の仕組みについて質問があり、議員から地域包括支援センターなどの役割が説明されました。中には「ヒアリングで頑張ってしまう高齢者が本来の状態を伝えられない」という指摘を、制度の構造的な課題として生徒が捉えている場面もありました。

また、こどものSOSと同様、高齢者の相談窓口として地域包括支援センターが虐待・介護疲れも含めて対応していることも説明されました。

4. 生徒が考える「自分たちにできること」

- ・小学校での福祉体験授業・職業体験の取り組み
- ・老人ホーム×こども食堂など、接点をつくる場
- ・若い住民の参画機会をつくる、掲示板などの広報の活用
- ・世代を超えて集まれる地域の間。隣のおばあちゃんとの関係が原点

5. 「広報・情報発信」をめぐる議論(追記)

終盤、情報が届かない問題から「どうすれば見てもらえるか」へ議論が深まりました。

- ・加古川市の広報はイラスト・写真が多くわかりやすい。
 - ・大学生や有名人のインタビューなど、入口となるコンテンツがあれば読もうと思える。
 - ・公園・自治会の掲示板など目に触れる場所への掲示が身近さにつながる。
- 情報の中身だけでなく、誰が・どこで・どんな形で届けるかという課題が見えました。

6. 全体を通じて

- ・制度はあるが広報が届いていない。
- ・高齢者福祉を「行政・大人の仕事」と切り離さず、若い世代が知る・つながる・参画する流れをどうつくるか。
- ・高校生自身が「自分ごと」として語れていたこと、そして「広報・デザイン」という具体的な切り口まで議論が展開できたことが収穫でした。

建設環境経済常任委員会「じょうとんバスについて」

1. じょうとんバスに対する若者の利用現状と課題

アンケートや対話から、現在のじょうとんバスが抱える「若い世代(特に学生)の生活動線やニーズとの乖離」が浮き彫りになりました。

① 認知・利用経験の希薄さ

- ・乗車経験の欠如：「見たことはあるが乗ったことはない。普段は電車と徒歩、雨の日は親の車の送迎を利用する」といった、選択肢自体に入っていない現状が最多です。
- ・存在への認知不足：「バス自体を普段見かけない」「学校の周辺しか知らず、日常生活で移動に困ることがない」など、存在が風景の一部として素通りされている傾向があります。
- ・個人の理由：「乗り物酔いがあるため利用しない」という体質的な理由を挙げる生徒もいました。

② ダイヤ・利便性の課題(学生のタイムスケジュールとの不一致)

- ・登下校での使いにくさ：「下校時間が18時半だが、じょうとんバス(あるいは接続バス)は終バスが早いので使いにくい」という高砂市内在住の生徒からの声が上がりました。行きは良くて帰りの便がないなど、学生の活動時間帯に即していない点が大きな障壁となっています。

2. 自由記述からみる「政治・市政への意識変化」

じょうとんバスを一つのテーマとして議員と直接対話したことで、生徒たちの主権者意識に極めてポジティブな変化が見られました。

○身近な行政としての気づき

- ・今までコミュニティバスについてほとんど何も知らなかったが、色々なことを知れて考えるきっかけになった。」
- ・「議会は大きな問題だけを扱っていると思っていたが、毎日の生活の中の問題(バスなど)にも目を向け、小さなことから解決していっていると感じた。」
- ・「自分が実際に関わることで、もっと色々を知りたくなった。市政を自分事としてとらえていきたい。」

3. 若者世代から創出された「バズるバス」への斬新なアイデア

議員側からの「自動運転」や「AIオンデマンドバス」といった先進技術(DX)の提案に対し、高校生からは『移動手段としてのバスではなく、乗ること自体を目的化する(バズらせる)』という、若者ならではのエンタメ性とデジタルを掛け合わせた柔軟なアイデアが多数提案されました。

① デジタル・エンタメとのタイアップ

- ・位置情報ゲームの活用(ポケモンGO等):「バスに乗ることでしか手に入らない限定・レアポケモンが出現する仕組みを作る。ゲーム人口の10%を狙うだけでも、そこに行かないと取れないとなれば、全国から人が集まる」という非常に具体的な集客プロモーション。

- ・デジタルコンテンツの配布:「市内の神社や竜山石(宝殿駅周辺など)をバスで訪れると、限定の電子壁紙がもらえる」といった、地域資源と連動した観光ルートのデジタルスタンプラリー化。

② 車内空間のカスタマイズ

- ・韓流・エンタメバス:「K-POPを流した韓流バスなど、乗っていて楽しいラッピングバスの運行」

- ・機能性の追求:「(部活や勉強で疲れているため)車内で快適に仮眠が取れるバス」「長距離・長時間の移動も想定したトイレの設置」

③ 広報発信・プロモーション

- ・SNS発信の強化:「バスをバズらせるような、若い世代に向けた発信が必要」

- ・動画メディアの活用:「市議会が公式 YouTube など、コミュニティバスの宣伝を積極的にすればより効果(宣伝性)があるのではないか」

4. 議会・委員会としての提言(今後の施策反映ポイント)

① 学生の動線に合わせた「ダイヤの最適化」

下校時間(18時半以降)に合わせた便の拡充、およびJR(曾根駅・宝殿駅等)と山陽電車(山陽曾根駅等)をスムーズに繋ぐ学生特化型ダイヤの検討が必要です。また、アンケートでも「JR運休時は、JR曾根駅～山陽曾根駅間のバスを午後7時ごろまで走らせてほしい」という非常に切実なリスク管理上の要望(1件)が出されており、公共交通の補完計画として検討の余地があります。

②「移動手段」から「地域資源のコネクター」への転換

高校生が提案した「レアポケモン」「神社・竜山石」「電子壁紙」の掛け合わせは、単なる移動インフラとしての赤字解消策ではなく、「観光誘客・地域振興のための動くコンテンツ」としてしょうとんバスを再定義する大きなヒントです。観光部局とも連携し、実証実験の検討に値します。

③ 市外通学生へのアプローチと「生徒会広聴の仕組み化」

姫路・神戸・相生など市外からの通学生にとって、高砂市は「学校周辺しか知らない場所」になりがちですが、部活動等で市内の体育館や他校へ行く機会(計2件)は存在します。生徒からの提案にあった「各校の生徒会で意見を集約し、定期的に議員に報告・交換する場を設ける」という広聴の仕組みを導入し、学校・生徒会を通じて「しょうとんバス学生1日体験乗車券」などを配布する、認知度向上施策の実施を推奨します。